

研究ノート

1960年代に見るアメリカの20世紀¹

柏岡 富英

要 旨

本稿では、1960年代のアメリカにおける社会騒乱が、全体として、「アメリカン・クリード」とどうかかわっていたかを検証するための第一段階として、どのようなイシューがどう表面化したかを、いわば叙事的年代表の形に整理することを目的とする。取り上げるイシューは政治イデオロギー、公民権運動、女性権運動、環境保護および消費者運動、ベトナム反戦運動、およびカウンター・カルチャーである。この時代のアメリカは、その「現状」において痛烈に批判されたものの、批判の梃子は建国以来の「アメリカン・クリード」そのものであった。したがって、さまざまな批判や運動は、むしろ、アメリカ的原理を検証するうえで、格好の材料を提供していると考えられる。これは、アメリカ史上で幾度も繰り返された「覚醒」や「復興」が、つねに宗教的原点に立ち戻ろうとする運動であったことと密接にかかわっている。

キーワード 60年代、アメリカン・クリード、政治イデオロギー、公民権、女性権、環境保護、消費者、ベトナム反戦、カウンター・カルチャー

I. イントロダクション

ヘンリー・ルースが、『ライフ』誌上で高らかに「アメリカの世紀」を謳いあげたのは1941年のことであった²。1950年代のアメリカは希望に満ち、右肩上がりの「豊かさ」はもはや既定の事実として受け止められていた。デイビッド・ポターの *People of Plenty*³ やケネス・ガルブレイスの *The Affluent Society*⁴、あるいはダニエル・ベルの *The End of Ideology*⁵ が書かれたのもこの時代であった。戦後のアメリカはまた、国際的にも最

強の国家として君臨することになった。

しかし、そのわずか十年後、アメリカは史上希に見るほどの激動の時代を迎える。60年代から70年代初頭にかけて、SDS や SNCC に代表される学生運動、マーチン・ルーサー・キングを中心とする市民権運動、ベティ・フリーダンを嚆矢とする婦人権運動、反ベトナム戦争運動、ヒッピー運動などは、50年代の「リベラル・コンセンサス」に根底的な挑戦を突きつけることとなった。これ

1 本稿は、2001年度日本政治学会テーマ部会「歴史としての20世紀」における報告に加筆訂正したものである。

2 Henry R. Luce, "The American Century," *Life*, February 17, 1941, pp. 61-65.

3 David Morris Potter, *People of Plenty: Economic Abundance and the American Character* (Chicago: The University of Chicago Press, 1954).

4 John Kenneth Galbraith, *The Affluent Society* (New York: Mentor Books, 1958).

5 Daniel Bell, *The End of Ideology: On the Exhaustion of Political Ideas in the Fifties* (Glencoe, Ill.: Free Press, 1960).

らの運動は1970年代半ばには沈静化し、「新保守」が主流を占めることになるが、20世紀のアメリカを考えるうえで、1960年代が大きな転換点であったことは疑いを容れない。

本稿では、60年代の騒乱が、全体として、「ア

メリカン・クリード」とどうかかわっていたかを検証するための第一段階として、どのような 이슈がどう表面化したかを、いわば叙史的年代表の形に整理することを目的とする。

II. 政治イデオロギー

1960年に大統領選挙を制したジョン・F・ケネディのスローガンは「ニュー・フロンティア」であった。アメリカは隆盛を極めていたが、もっと先へ進まねばならない、というメッセージが込められていた。ケネディは当時43才であり、国民は、その政治的アクティビズムに多大の期待をもった。しかし現時点から振り返ってみると、彼の内政は具体的な果実を結ばなかったように見える。新しい教育プログラムや減税策は、ついに議会の承認をえられないままであった。外交でもケネディはピッグズ湾事件(1961)やキューバ危機(1962)などの綱渡りを強いられた。

1963年11月にケネディが暗殺され、副大統領であったリンドン・B・ジョンソンが大統領に就任する。ケネディが「ベスト・アンド・ブライテスト」に取り囲まれ、青雲の志に燃えた一種のインテリではあっても、現実の政治においては見るべき成果を挙げえなかったのに比べ、「偉大な社会」や「貧困の撲滅(War on Poverty)」をモットーに掲げたジョンソンは、議会工作に長けた辣腕政治家であった。ジョンソンは1964年の選挙で再選され、公民権法の制定、社会保障の拡充、学校教育に対する連邦援助などの政策を次々に実現化した。しかし表面的には順調に見えた、この「リベラル・コンセンサス」の時代の足下では、重大な亀裂が生じていた。

ジョンソンはベトナム戦争を勝ち取るべく躍起

になっており、1964年には「トンキン湾事件」をきっかけ(あるいは口実)に、議会の支持をえて戦争を拡大し、65年には全面的北爆および地上軍の大量投入に踏み切ったが、これに対して、学生をはじめとする国民の反発が強まり、ジョンソンは1968年の大統領選挙への出馬を断念する。

1968年の選挙では共和党のリチャード・ニクソンが民主党のヒューバート・ハンフリーに辛勝をおさめ、一般的には、この選挙をもって、ケネディに始まるリベラルな改革主義の時代が終焉したとされる。ニクソンは「大きな政府」がある程度は不可避としながら、政府の縮小と合理化、連邦から州ないし地方への権限の委譲に意を用いる。ニクソン政権が二期目に入った1973年、泥沼化していたベトナム戦争は、パリ平和協定の締結(1月22日)をもって終結するが、1974年8月9日、ニクソンは「ウォーターゲート事件」のために辞任に追い込まれる。なお、ニクソンの副大統領であったスピロ・アグニューも1973年、脱税の罪の確定により辞任したため、後任副大統領となったジェラルド・フォードが、ニクソンの後を継いで大統領に就任する。しかしフォードは1976年の選挙で、民主党のジミー・カーターに僅差で敗れ、政権は一時的に民主党の手にわたるが、アメリカの保守化の傾向が覆されたわけではなく、1980年の選挙は、選挙人数で489対49という大差をもってロナルド・レーガンが地滑りの勝利をお

さめ(一般投票数はレーガンが430万、カーターが約40万)⁶、「保守化」は一層顕著となる。

III. 公民権運動

アフリカ系アメリカ人の差別撤廃運動は長い歴史をもっているが、1954年、連邦最高裁が、公立学校における白人と黒人の別学を定めた州法を違憲とした「ブラウン事件判決」は、その後の公民権運動にとって画期的な意味をもった。翌年にはアラバマ州モントゴメリーで「バス・ボイコット」が起きる。この運動ではマーティン・ルーサー・キング師が指導的役割を果たすが、これはその後の非暴力かつ直接的な抗議運動の嚆矢となった。また1960年2月、数人の黒人大学生がノースカロライナ州グリーンズボロの白人用ランチカウンターに座り込んだ。この「シット・イン」運動は一挙に広がり、黒人の利用を拒む食堂、売店、劇場、公共施設など、いたるところで座り込み運動が繰り返された。1963年には参加者20万人を数える「ワシントン大行進」において、キング師による「私には夢がある」演説が行われて、公民権運動は最高潮に達する。

一連の抗議運動では、NAACP(全米黒人地位向上協会)、SCLC(南部キリスト教指導者会議)、SNCC(学生非暴力調整委員会)、CORE(人種平等会議)など、白人をも巻き込んだ諸団体が大きな力を発揮した。これらの運動が非暴力を貫徹しようとしたのに対し、反対勢力や鎮圧にあたった警察が往々にして暴力的手段に訴えたことは、テレビや新聞雑誌で大々的に報じられ、それが市民運動の勢力拡大に貢献する結果となった。

ジョンソン大統領にとって、公民権問題は最大の達成目標の一つであった。彼は卓抜な政治力に

より、1964年には、おそらく南北戦争以来もっとも強力な公民権法、また1965年には投票権法を成立させる。この投票権法によって、それまでは選挙への参加を阻害されていた何百万人もの黒人が登録を行い、その後の選挙や政策論争に重大な変化をもたらすことになった。

ジョンソン大統領はまた、雇用や教育の場で人種や性別の差別を撤廃するための手段として、1965年に「アファーマティブ・アクション」(積極措置)を成立させる。ジョンソンは「長い間鎖につながれていた人たちに必要なのは、単なる権利の平等ではなく、結果の平等だ」と語り、アファーマティブ・アクションには「過去の贖罪」としての意味合いが込められていることを明示した⁷。

しかし1960年代後半には、公民権運動に早くも陰りが見え始める。まず第一に、黒人運動の内部から、非暴力主義への反対の声が挙がり、戦闘的な分派が台頭する。たとえば1964年にはボビー・シール、ヒューイ・ニュートン、エルドリッジ・クリーバーによって「ブラック・パンサー党」が結成される。1966年、SNCCの委員長であったストークリー・カーマイケルは「ブラック・パワー」の原型となる組織をアラバマ州で発足させる。また1964年に「ブラック・マスラムズ」(あるいは「ネイション・オブ・イスラム」)を脱退したマルコム・Xは、どんな手段(暴力を含む)に訴えても白人の人種差別と闘う権利があると唱え、「黒人と白人の絶対的な分離」を主張した。

6 数字は Gorton Carruth (ed.), *The Encyclopedia of American Facts and Dates* (NY: Harper, 1933) による。

7 読売新聞社(編)『20世紀 どんない時代だったのか?アメリカの世紀・総集編』(読売新聞社、2000)、42頁。

彼は、1965年、3人の「ネイション・オブ・イスラム」党员によって暗殺される。こうした派閥対立の結果、「ブラック・パンサー党」が解散したのは1975年のことであった。

定着するかに見えた「アフーマティブ・アクション」にも反発が強まっていった。その代表例は1978年6月の「バッケ対カリフォルニア大学」判決である。カリフォルニア大学の医学部への入学を許されなかったアラン・バッケ（白人）は、それが人種別のクォータ制のゆえであると訴え、最高裁は大学に対し、バッケの入学を命じたのである。同じく学童の「バシング」に対しても様々

な批判が寄せられた。この様な風潮の中で、ニクソン大統領は「南部的戦略」、すなわち人種問題への取り組みがあまりにも性急であると感じている白人有権者に訴えかけることで政権基盤を強化した、とされている。白人インテレクチュアルの間でも、たとえばグレイザーとモイニハン是人種間の平等には基本的に賛成であったが、戦闘的黒人集団を糾弾し、またアシミレーションを国家目標とすることに疑問を呈した⁸。ミルトン・ゴードンもまた、アシミレーションには限界があり、人種と宗教を基とする構造的差別の撤廃は当分の間望めないと論じた⁹。

IV. 女性権運動

60年代の婦人運動（これを、憲法修正第19条に結実する一連の婦人権運動と区別して「第二波フェミニズム」とも呼ぶ¹⁰）は、公民権運動やカウンターカルチャー運動の大きなうねりの中で展開した。黒人解放運動に参加した女性運動家が、自らもまた女性として差別を受けているという認識にいたるのは当然のことであった。1964年公民権法にも、人種と並んでジェンダーによる差別を禁じる条項が織り込まれた。女性は、家でも職場でも、決定権を握り、高い賃金と地位を享受しているのは男性に限られていることに反感を募らせていった。彼女たちはまた性そのものにおいて「搾取」されていると感じるようになった。

この時代の女性運動の直接の「引き金」はベテ

ィ・フリーダンの *The Feminine Mystique*¹¹ であった。フリーダンは「20世紀ただ中のアメリカで、女性たちが悩んでいた奇妙な胸騒ぎ、不満、渴望」を指摘し、「女性は自らの女性性における栄光よりも大きな到達点を望むことができない」という前提に縛られている、と論じた。

1966年にはフリーダンを含む28人の女性が「全国女性組織」(National Organization for Women: NOW) を結成し、女性の地位向上キャンペーンに乗り出した。2年後の68年には、ニュー・ジャージー州アトランティック・シティで開催された「ミス・アメリカ・ページェント」において、NOWは一匹のヒツジを候補者としてノミネートし、同時に「フリーダム・トラッシュ・キャン」

8 Nathan Glazer and Daniel P. Moynihan, *Beyond the Melting Pot: The Negroes, Puerto Ricans, Jews, Italians, and Irish of New York City* (Cambridge: Cambridge University Press, 1963); Nathan Glazer, *Affirmative Discrimination: Ethnic Inequality and Public Policy* (New York: 1975).

9 Milton Gordon, *Assimilation in American Life: The Role of Race, Religion, and National Origins* (New York: 1964).

10 Mary Kupiec Cayton and Peter W. Williams (eds.), *Encyclopedia of American Cultural and Intellectual History*, 3 vols. (New York: Charles Scribner's Sons, 2001), Vol. II: 161-171.

11 Betty Friedan, *The Feminine Mystique* (NY: Norton, 1963).

を設置して、ブラジャー、ガードル、ヘア・カーラーなど「拷問の道具」を投げ入れて女性解放を訴えた。1972年にはグロリア・スタイネムが雑誌『ミズ』の刊行を始める。なお、「ウーマン・リブ」という言葉は、1966年頃に新左翼の女子学生が使ったのが最初だといわれる¹²。

このような全国的な運動の他にも、地域レベルでの活動も盛んに行われ、さまざまなテーマ(同性愛、意識高揚、中絶)をめぐる活発な運動を繰り広げた。しかし1972年の憲法の平等権修正(憲法第27修正: ERA)をきっかけに、早くも反動の波が襲いかかることになる。合衆国も州も、法の下における権利の平等を、性によって否定し

たり制限したりしてはならないことを旨とする同修正は、州による批准にかけられたが、成立には5州足りず、82年に時効切れで流れることになった。フィリス・シュラフィをはじめとする保守派が、この修正は女性の地位向上に何の貢献もなさないばかりか、女性の既得権益さえ脅かすものであるとのキャンペーンを繰り広げ、レーガン政権もこのキャンペーンを支持したことが功を奏したのである。結果として不成立の憂き目を見たものの、ERAの象徴的な意味は大きく、アメリカにおける女性の地位は、60年代をもって大きく変化したと評価して間違いなからう。

V. 環境保護運動、消費者運動

環境保護運動の先兵を切ったのは、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』(1962)であった¹³。カーソンはDDTをはじめとする化学殺虫剤の使用を強烈に批判し、化学薬品による汚染を消し去ることは殆ど不可能で、それがもたらす連鎖的作用はありとあらゆる生物の細胞一つ一つに浸透しつくすだろうと警告した。

殺虫剤、産業廃棄物、自動車の排気ガスに対する危機感が高まる中、1970年4月22日には全米各地で「アース・デイ」行事が繰り広げられた。また環境保護精神はジョンソン大統領の「偉大な社会」に盛り込まれ、幾つかの具体的な法制度としても結実していく。環境保護運動は1960年代の社会運動の中でも、後々までもっとも大きな具体的な成果を挙げ続ける運動であり、ニクソン政権下でも1970年に「環境保護庁(EPA)」(1970)が新

たに設置されたほか、「クリーン・ウォーター・アクト」(1987)、「クリーン・エアー・アクト」(1990)が制定されて、今日にいたるまで世界的な潮流となった。

消費者運動も、環境保護運動と密接な関わりの中で展開した。「豊かな」アメリカが新製品の購入に狂奔する中であって、利益一本槍の企業に対し、消費者の利益を保護しようという動きが活発化してくるのである。代表的活動家はラルフ・ネイダーであった。初期のネイダーは自動車の安全問題に関心を寄せ、1965年に *Unsafe at Any Speed*¹⁴ を出版して、多くの車は車輪付きの棺桶であり、低速走行中であっても衝突が起こると運転者、同乗者とも支障の危険が高いと説いた。ネイダーの運動は1966年の *National Traffic and Motor Vehicle Safety Act* に結実する。運動家た

12 齋藤真、金関寿夫、亀井俊介、岡田泰男(監修)『アメリカを知る事典』(平凡社1991)、80頁。

13 レイチェル・カーソン『沈黙の春』、新潮文庫、1974。

14 Ralph Nader, *Unsafe at Any Speed: The Designed-In Dangers of the American Automobile* (NY: Grossman, 1965).

ち(たとえば「ネイダーズ・レイダーズ」)はその後も様々な方面の商品を槍玉に挙げていき、消

費者保護は政治的にも重大な課題として展開していく。

VI. ベトナム反戦運動

ベトナム戦争は1960年代から70年代にかけての最大の政治課題であり、アメリカ社会全体に深甚な影響をもたらした。ベトナムに投入されたアメリカ軍は最終的には50万人にもおよんだが、いったい何のために戦争をしているのかは判然としないままであった。反戦の気運が高まるにつれ、第二次大戦以降のアメリカ政治の本質が根底的に問われるようになったのである。

もともとベトナムはフランスの統治下にあったが、米国は冷戦下における「封じ込め」政策を遂行するにあたってフランスの協力が不可欠であったため、フランスのホー・チ・ミン軍撲滅の闘いに資金面での援助を行っていた。しかし1954年、ディエン・ビエン・フの戦闘で敗れた後、「ジュネーブ協定」によってベトナムは17度線を境に北と南に分断され、北にはホー・チ・ミン政権、南にはゴ・ディン・ディエム政権が誕生する。アイゼンハワー大統領はゴ政権を支持して軍資金および軍事アドバイザーを提供していた。

1960年代にはいると、ケネディ大統領のもとで、アメリカのベトナム介入は一層顕著になる。1961年には700名たらずであった軍事アドバイザーは、ケネディ暗殺の63年には1万6000人に増強されていた。それでもベトナムの政情不安は一向に改善の兆しを見せるどころか、ゴ政権は国民の間できわめて不評で、ホー・チ・ミンと北ベトナムに支えられたベトコンが勢いを増してくる。ジョンソン大統領はケネディにもましてベトナム

での勝利に熱意を燃やし、1964年8月の「トンキン湾事件」をきっかけにして、議会から戦争遂行権限をとりつけることに成功する。ジョンソン大統領在職中に、ベトナム駐留アメリカ軍は1965年の2万5千から、68年の55万へと飛躍的に増強される。

戦争のエスカレーションに対して、ハンス・モーゲンソー、ノアム・チョムスキなどの研究者が批判を繰り広げると同時に、学生もミシガン大学における「ティーチ・イン」(1965年3月)をはじめとして、トルーマン以来の反共政策に疑義を突きつけ、反戦運動は全国のキャンパスに広がっていく。中心的な役割を担ったのは SDS (Students for a Democratic Society) であり、徴兵制、大学における軍事教練 (ROTC)、ナパーム製造をはじめとする軍事産業などが槍玉に挙げられた。反戦運動は大学にとどまらず、たとえば Women Strike for Peace という女性団体は「ベトナムのジャングルを息子たちの血で濡らすな」と叫んで、戦争の停止を訴えた¹⁵。文学においてもジョゼフ・ヘラーの『キャッチ22』(1961)やカート・ヴォネガットの『スローターハウス5』(1969)が戦争を強烈に批判した。

1968年1月の「テト攻勢」は、軍事的には共産主義勢力の敗北に終わるが、アメリカは政治的、心理的に甚大な被害を被った。この事件は、政府の楽観的観測にもかかわらず、戦争が終結からはるかに遠いことを、如実に印象づけた。また「テ

15 Todd Gitlin, *The Sixties: Years of Hope, Days of Rage* (NY: Bantam, 1987).

ト攻勢」中の、米軍・南ベトナム軍による様々な残虐行為や、マイ・ライ村での殺戮などが、テレビニュースで生々しく放映され、戦争に対するアメリカ国民の疑惑はますます深まった¹⁶。1970年5月、オハイオ州ケント州立大学では、反戦集会を開いていた学生や一般市民に対してナショナル・ガードが発砲して学生4人が死亡、9人が負傷するという事件が起こったことは、戦争を巡って国内の緊張が高まっていたことの象徴である。ベトナムに送り出された兵士の大部分が黒人や貧困層の若者であったことも、アメリカ社会の不平

等をさらけ出す結果となった。

1973年1月、ついに「パリ和平協定」が調印され、3月末には捕虜となっていた全ての米兵が釈放されて、アメリカ軍の全部隊がインドシナから撤退した。しかし戦争の傷跡は大きく（直接の戦闘による死者だけで5万8千人、総費用は1500億ドルに上ると言われる）、帰還兵のトラウマが大きな問題になるとともに、国民の多くはアメリカがとってきた外交政策、とくに「世界の警察」としてのアメリカの役割に深いシニシズムを抱くようになる。

VII. カウンター・カルチャー

1960年代の大学は、政治活動の一大拠点であった。「ベビー・ブーマー」が大学就学年齢に達し、60年代末の学生数は40年代の4倍にもなった。学生団体のうち、もっとも大きな影響力をもったのは、1960年に結成された SDS (Students for a Democratic Society) であった。「ポート・ヒューロン宣言」(1962)によると、SDS に参加した学生たちは、快適な環境に育ち、高等教育まで受けながら、彼らが受け継ごうとしている世界を不快な思いで眺めていた¹⁷。SDS を代表とする「新左翼」は現代社会の孤独と疎外を批判し、自由と参加民主主義の実現を訴えた。新左翼の基本的な心情は、挑戦的なフォーク・シンガーであったボブ・ディランの “The Times They Are A-Changing” によく表されている。

学生運動の嚆矢は1964年、カリフォルニア大学バークレー校で起こった、言論の自由に関する紛

争であった。さらにベトナム戦争に対する義憤が学生の抗議運動に拍車をかける。大学を舞台とする反戦運動でもっとも激烈を極めたのは、1968年、コロンビア大学の学生が軍事研究に反対して建物を占拠した事件であった。SDS は同年8月の民主党全国大会にも乗り込んで反戦を訴えるが、警察の逆襲を浴び、一般市民や報道関係者などとともに多数の負傷者を出した。この事件をもって、SDS は事実上解体してしまう。学生の新左翼は短命ではあったが、ベトナム戦争やアメリカ社会の不平等を告発するうえで、大きな役割を果たした。しかし「ウェザーメン」に代表されるような過激分派が生み出される過程で、一般社会の反感を買い、その支持基盤を失っていったのである。

「ヒッピー」もまた、60年代の若者を席卷した一大運動であった。ヒッピーを一つの統一体とし

16 Chester J. Pach, Jr., “And That’s the Way It Was: The Vietnam War on the Network Nightly News,” in David Farber (ed.), *The Sixties: From Memory to History* (Chapel Hill, NC: The University of North Carolina Press, 1994).

17 Todd Gitlin, *Op. Cit.*, p. 27; Lyman Tower Sargent (ed.), *Extremism in America: A Reader* (NY: New York University Press, 1995), pp. 358-9.

て捉えることは困難であるが、フレッド・デイビスは、その特徴をいくつかの対立項目を用いて描写している¹⁸。

immediacy contra past preoccupation and future concern

the *natural* contra the artificial

the *colorful and baroque* contra the classical, contained and symmetrical

the *direct* contra the mediated, interposed, or intervening

the *spontaneous* contra the structural

the *primitive* contra the sophisticated

the *mystical* contra the scientific

the *egalitarian* contra the hierarchical

the *polymorphous and androgynous* contra the singular

the *diffuse* contra the categorical

the *communal* contra the private

ヒッピー文化の中心的な柱に、フリー・セッ

クス(経口避妊薬の開発が大きな影響をもった)とドラッグ(マリワナと LSD)がある。ティモシー・リアリーは「アシッド・テスト」という集会を通じて LSD を広め「Tune in, turn on, and drop out」という有名な言葉を残した。またチャールズ・ライクは *The Greening of America* の中で60年代の社会変化を論じ、過去の疲弊した風潮の中から生まれつつあった新しい意識を賞賛している¹⁹。カウンターカルチャーは、たとえばサンフランシスコのヘイト・アシュベリー地域に見られたような荒廃と無縁ではなかったが、音楽、服装、食事、性などの分野で新しい空間を作りだし、それが今日の主流文化の中にしっかりと根を下ろしたことは確かである。

1970年代半ばには、新左翼による政治活動にも、文化的カウンターカルチャーにも衰えが目立ち始め、それに代わってトム・ウルフが「ミー・デケイド」²⁰と名付けた風潮が優勢になって、瞑想や禅、あるいはオカルト、新宗教が流行する。

VIII. エピローグ

1960年代から70年代にかけて、アメリカは劇的な変化を経験した。50年代を支配した「リベラリズム」(「成長リベラリズム」)に対して、根元的な挑戦が突きつけられたのである。ベトナム戦争によって、アメリカが自ら任じていた世界的なミッションに対する自信がゆらぎ、アメリカの位置づけは再検討されねばならなくなった。また公民権運動や学生運動は、不平等や

不正の問題を鋭く批判し、法制、政策、あるいは意識面での改革を避けて通ることはできなくなった。

60年代に提起された諸問題は、いずれも、そのとき初めて意識され、具体的な形をとったのではない。歴史や経験則といった伝統が社会のタガの役割を果たしている社会とは異なり、新しい制度上の実験や変革こそが伝統の柱をなす

18 Fred Davis, *On Youth Subcultures: The Hippie Variant* (NY: General Learning Press, 1971), pp. 14-5.

19 Charles Reich, *The Greening of America* (NY: Random House, 1970).

20 Tom Wolfe, *The Electric Kool-Aid Acid Test* (NY: Bantam, 1968).

「世界最初の新興国家」にとって、建国以来の三世紀は、社会のどの側面をとってもスクラップ・アンド・ビルドを運命づけられていた。さまざまな角度からの現状批判は、建国の初期に、すでにその種を見いだすことができる。60年代に取り上げられたテーマの大部分は、初期の植民地が抱えていたテーマと、強い一貫性をもっている。とすれば、第二次大戦をへて、この「新興国」が超大国の地位を確立したまさにそのときに、「アメリカの夢」に対する内部告発が大噴出したのは、実験国家の危うさを伺わせると同時に、アメリカの面目が遺憾なく発揮されたものと解することもできる。その意味で、60年代の騒乱は、アメリカの宗教が幾度も繰り返してきた「覚醒」や「復興」運動が、社会全体におよんだものと言えるのかもしれない。すなわち、この騒乱は、外圧によってではなく、「アメリカン・クリード」そのものが現状批判の梃子となったのである。

むろん、これに対する反動もまた大きかった。多くの人が、この時代の激動とカオスから抜け出して、安定的な日常と強いアメリカを取り戻したいと願ったのは当然のことであろう。70年代後半には、ほぼ50年にわたって主流をなしてきた民主党同盟が崩れ、ロナルド・レーガンを旗頭とする保守主義にとってかわられる。しかし、それは、60年代の社会運動が批判したアメリカの諸問題が解決したことを意味しない。60年代を統一的に評価することはきわめて困難であるが、この時代の騒乱は、「アメリカン・クリード」を検証するための格好の材料である。

イントロダクションで述べたとおり、本稿は、この作業の手始めとして、どのような 이슈がどのように取り上げられたかを概観した

ものに過ぎない。また、たとえば宗教におけるさまざまな動きを取り上げる余力がなかった。個別の 이슈を、さらに詳しく検証し、それらを統合して60年代の統合的な叙述と分析を行うことが今後の課題である。

参考文献

- レイチェル・カーソン(1998)『沈黙の春』(新潮文庫、1974)。
- 筑紫哲也(監修)、『Our Times 20世紀』(角川書店)。
- 齋藤 真、金関寿夫、亀井俊介、岡田泰男(監修)(1991)、『アメリカを知る事典』(平凡社)。
- 産経新聞取材班(2000)、『20世紀かく語りき』(産経新聞社)。
- 読売新聞社(編)(2000)、『20世紀 どんな時代だったのか?アメリカの世紀・総集編』(読売新聞社)。
- Bell, Daniel (1960), *The End of Ideology: On the Exhaustion of Political Ideas in the Fifties* (Glencoe, Ill.: Free Press).
- Blumberg, Rhoda Lois (1991), *Civil Rights: The 1960s Freedom Struggle*, Rev. Ed. (Boston: Twayne Publishers).
- Bunzel, John H. (ed.) (1988), *Political Passages: Journeys of Change Through Two Decades, 1968-1988* (NY: The Free Press).
- Carroll, Peter N. (1982), *It Seemed Like Nothing Happened: America in the 1970s* (New Brunswick: Rutgers University Press).
- Carruth, Gorton (1993), *The Encyclopedia of American Facts and Dates*, Ninth Ed. (NY: Harper).
- Cayton, Mary Kupiec and Peter W. Williams (eds.) (2001), *Encyclopedia of American Cultural and Intellectual History*, 3 vols. (NY: Charles Scribners Sons), esp. Vol. 2.
- Cochran, Thomas C. (1985), *Challenges to American Values: Society, Business and Religion* (NY: Oxford University Press).
- Davis, Fred (1971), *On Youth Subcultures: The Hippie Variant* (NY: General Learning Press).
- Dickstein, Morris (1989), *Gates of Eden: American Culture in the Sixties* (London: Penguin).
- Farber, David (ed.) (1994), *The Sixties: From Memory to History* (Chapel Hill, NC: The University of North Carolina Press).
- Friedan, Betty (1963), *The Feminine Mystique* (NY:

- Norton).
- Galbraith, John Kenneth (1958), *The Affluent Society* (New York: Mentor Books).
- Gitlin, Todd (1987), *The Sixties: Years of Hope, Days of Rage* (NY: Bantam Books).
- Glazer, Nathan (1975), *Affirmative Discrimination: Ethnic Inequality and Public Policy* (New York).
- Glazer, Nathan and Daniel P. Moynihan (1963), *Beyond the Melting Pot: The Negroes, Puerto Ricans, Jews, Italians, and Irish of New York City* (Cambridge: Cambridge University Press).
- Goldstein, Richard (1989), *Reporting the Counterculture* (Boston: Unwin Hyman).
- Gordon, Milton (1964), *Assimilation in American Life: The Role of Race, Religion, and National Origins* (New York).
- Grun, Bernard (1991), *The Timetables of History*, 3rd Rev. Ed. (New York: Simon & Schuster).
- Harris, Marvin (1981), *America Now: The Anthropology of A Changing Culture* (NY: Simon and Schuster).
- Hayden, Tom (1988), *Reunion: A Memoir* (NY: Collier Books).
- Hodgson, Godfrey (1978), *America in Our Time* (NY: Vintage Books).
- Hofstadter, Richard (1963), *Anti-Intellectualism in American Life* (NY: Vintage Books).
- Jamison, Andrew and Ron Eyerman (1994), *Seeds of the Sixties* (Berkeley: University of California Press).
- Kahn, Vervan (ed.) (2001), *Beacham's Encyclopedia of Social Change: America in the Twentieth Century*, 4 vols. (The Beacham Group LLC).
- Kallen, Stuart A. (ed.) (1994), *Sixties Counterculture* (San Diego, CA: Greenhaven Press).
- Lasch, Christopher (1965), *The New Radicalism in America, 1889-1963* (NY: Vintage Books).
- Luce, Henry R. (1941), "The American Century," *Life*, February 17, pp. 61-65.
- Miller, Timothy (1991), *The Hippies and American Values* (Knoxville, TN: The University of Tennessee Press).
- Nader, Ralph (1965), *Unsafe at Any Speed: The Designed-In Dangers of the American Automobile* (NY: Grossman).
- Oakley, J. Ronald (1990), *God's Country: America in the Fifties* (NY: Dembner Books).
- Pendergast, Tom and Sara Pendergast (eds.) (2000), *St. James Encyclopedia of Popular Culture*, 5 vols. (Detroit: St. James Press).
- Potter, David Morris (1954), *People of Plenty: Economic Abundance and the American Character* (Chicago: The University of Chicago Press).
- Reich, Charles (1970), *The Greening of America* (NY: Random House).
- Sandel, Michael (ed.) (1984), *Liberalism and Its Critics* (Oxford: Basil Blackwell).
- Sargent, Lyman T. (ed.) (1995), *Extremism in America* (NY: New York University Press).
- Whalen, Jack and Richard Flacks (1989), *Beyond the Barricades: The Sixties Generation Grows Up* (Philadelphia: Temple University Press).
- Wolfe, Tom (1968), *The Electric Kool-Aid Acid Test* (NY: Bantam).
- Yankelovitch, Daniel (1981), *New Rules: Searching for Self-Fulfillment in a World Turned Upside Down* (NY: Random House).
- Yinger, J. Milton (1977), "Presidential Address: Countercultures and Social Change," *ASR* 42(6), 833-853.
- Zunz, Olivier (1998), *Why the American Century?* (Chicago: The University of Chicago Press).